

注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【タイトル】

流されて恋姫

【作者名】

茶葉

【あらすじ】

グリードアイランドから出てきたら辺り一面の高野

え!?戦争?漢?武将?いたいどうなってるの!?

気づいたら異世界に飛ばされた主人公、この外史の結末は何処に向かうのか

これは作者が妄想を垂れ流す小説です

不定期投稿となりますが肩の力を抜いて揺るーく楽しんでってください

グリードアイランド

緑がかった普通にはありえない色をして角が生えた熊のような巨体が近くの木ごと自分に害をなす敵を切り裂く。

木が大きな音をたてて倒れ、砂煙を上げる。

決まった、熊が緊張を解いた瞬間にドオンと爆発音とともに熊の巨体が吹っ飛んでいく。

何本も木を倒しながら吹っ飛んでいき^{キル}ほどのところで止まる。

黒い服に赤いマフラーをたなびかせ、黒いガンマン帽子を被った男は熊の前に立つと熊は奇妙な音と共に小さなカードになった。男はそれを拾うと右手を軽く挙げ小さく何かを呟く。

すると中くらいの本が何もないところから現れる、男は何ページかめくり窪みにカードをはめて本を再びどこかえと消す。

「そろそろあっちも終わったかな…」

仲間がいるだろう方向の空を見上げ集合場所に向かって歩き始めた。

ちょうど黒服の男が見上げた方向に小さい川があった、その川の中で熊と一人が睨みあっていた。

熊は黒服が倒したのと同じ姿であるが先程より少し大きい。

一方、男は柄が^{キル}で先端にパイナップル程の鉄の塊が付いたハンマーというよりは鎚のような武器を構えている。

男もサンダルに黒の七分丈ズボン、白のダブツとしたシャツを着ている。

熊が左前足を振り上げると一気に男に振り下ろす、男は鎚を使って爪を防ぎ、押し返す。

「しち、でかいのしちよしちよしち」

男が舌打ちをすると全身からオーラのようなものが出てくる、熊も雰囲気が変わったのを本能で感じ後ずさる。

熊が四足歩行のまま突進してくるのを右に飛ん避ける、ビシヨビシヨになってしまいが気にしている場合ではない。

熊は避けられたとわかると、その巨体からは考えられない跳躍力で男を潰しにくる、男は鎚を下から掬い上げるように振り迎撃する。

鎚は熊の前足の爪を破壊する、熊が怯んだ隙に脳天に鎚を全力で殴り付ける。

熊は断末魔をあげて倒れる、するとカードに姿を変える黒服と同じようにカードを本にしまい全身の力を抜くとオーラのようなものも消える。

「疲れたー簡単にサクッと行けるとおもったのに…」

ぶつぶつ呟きながら本を呼び出しカードを一枚取り出す。

「再来 リターン オン！リーメイロー！」

男が叫ぶと男の体が浮き凄まじいスピードで空を飛んでいった。

ここは城下町、リーメイロ。多くの人間が行き来している。ここらでは一番大きな町である。

表通りにある小さな酒場の隅のテーブルに鎚を持った男が待ち合わせをしていた黒服と黄色い鳥？のキグルミを着た二人と合流する。

「エル君おつかれ」

「おーやっときたッピー」
「はい酒」

黒服がコップに酒を注いで鎚の男、エルに渡す、黄色い鳥？はモシャモシャと焼き鳥をほづばっている。

「つぶはーでそっちはどうでした？」
「以来完了だよ」

黒服は熊の絵がついたカードを見せる、黄色い鳥？も食べる手を止めず片手で同じカードを見せる。

「それじゃあ食い終わったら報告いきましようか…主にカカトさんが食い終わったら…」

「ん？おへ？」
「ゆっくりでいいですよ、そういえばピロトさんは食べないのですか？」

「うん…カカトの食べっぷりを見ると胸焼けしそうで…」

ピロトは胸を押さえてカカトをチラッと見る。

「せめて鳥じゃなければね…」(共食いだよね…)

「確かに…」(共食いですね)
「？」

カカトは二人の視線に首を捻っているが追加注をしようと店員を呼んでいる。

リーメイロから少し離れたところにある集落にいる依頼人にモン

スターの討伐の証として熊の絵がついたカードを三枚渡すと報酬として金の絵がついたカードを六枚貰った。

「臨時収入にしては大金だね」

「太っ腹っすねー」

「さあこの金でもう一件いくッピャー!!」

「遠慮します」

「ッピャー」

「このカードにもなれたねー」

「というかグリッドアイランドに慣れたって感じッピャー」

「最初はこのカードがお金ってわからずに皿洗いしてたしね」

グリッドアイランドとは、『ジョイステーション』専用のゲームであり全世界で1000本限定で販売された。

58億一括払いの高価格で売りに出されたが2万もの予約があった。

念という特殊能力を使える人間にしかプレイできない(念については後々説明が)

起動させ、念能力者があることをするとグリッドアイランドという世界に飛ばされる。

この世界での死は現実的世界での死であり、二度とコンテニューできない。

MMORPGの方式を取っており、プレイヤーは全員が同じ世界に集まる。

クリアするには指定されたカードを集めるのだが一枚一枚が入手困難で一生クリアできないプレイヤーもいる。

「そういえば天野さんは？」

「今日も元気に魚釣ってるッピャー」

「よく飽きないね、釣りバカ？」

「じゃあ天野さんのとこにいきませんか？」

「スシが食えるッピー!!」

カカトが両手をあげてピョンピョン跳ねているのをエルとヒロトは暖かい視線を送る。

(「まだ食つのかよ…」)

天野はエル達と一緒にグリードアイランドにきたプレイヤーの一人であり東の国の出身である。

東の国には生の魚の切り身を酢であえた米を乗つけた料理である。

「美食ハンターなだけあって料理は美味しいですよね…魚ばっかだけど」

「いろんな料理知ってるよね…魚ばっかだけど」

「魚ッピー」

ハンターとは、美食・怪物・遺跡・賞金首・財宝・幻獣など希少な物に生涯をかけた人物の総称である。

プロの資格を得るにはハンター協会が開催する試験をクリアする必要がある。

毎年10万人もの人間が参加するが、試験会場にたどり着く人間は一握りである。さらにその一握りの人間の中から合格することができるのは数人、死亡者すらでるこの数万分の1の試験をクリアしてもハンターの中では半人前ですらない。

合格後に裏試験という念能力を試す試験で合格することによって一人前となれる。

念能力の説明は後書きで

「カカトさんは幻獣ハンターでヒロトさんは遺跡ハンターですものね」

「そうッピ―この服も始めて見つけた幻獣のキグルミッピ―」
「自家製でしたよね…」

ちなみみエルは賞金首を狙うブラックリストハンターである。

「それじゃ天野さん所に行きましょっか」

「はい」

「おうッピ―」

エルが本を呼び出しカードを取り出して叫ぶ。

「同行 アカンパニー オン！天野！」

三人が光につつまれると例のごとく流星のように飛んでいった。